様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　25　年　6　月　10　日現在

機関番号：42665
研究種目：若手研究（B）
研究期間：平成 21 年度 ～　平成 24 年度
課題番号：21720105
研究課題名（和文）ヘミングウェイの遺作：オリジナル原稿の編纂方法とその問題点に関する総合的研究
研究課題名（英文）Hemingway's Posthumous Works:　Different Editing Methods and How They Deviate from His Original Manuscripts
研究代表者　フェアバンクス香織　（FAIRBANKS KAORI）
文京学院短期大学 その他部局等　助教
研究者番号：70409613

研究成果の概要（和文）：平成 21～24 年度の研究課題では、短編および中編の死後出版作品の特徴を明らかにし、さらにそれを平成 18～20 年度の研究課題の成果とからめて考察することによって、ヘミングウェイの死後出版作品研究の総括を行った。最大の成果は、1950 年代以降のヘミングウェイが、新たな一面を開拓しようとする反面、全盛期だった 1920 年代の作品スタイルに回帰しようとする態度を指摘した点である。50 歳を過ぎて突然、ニック・アダムズを復活させたり、処女短編集『われらの時代に』を彷彿とさせる短編群を書いた意図を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：Grant Aid for Scientific Research carried out during the period 2009-2012.　I engaged in research that covered Ernest Hemingway's posthumous works. In particular, I focused on his short stories and short novels that were written in the 1950. A major result of my research explains in detail Hemingway's longing to return to the 1920s – the best period of his life, both as a writer and as a man.　Hemingway's short stories related to World War II and his short novel, "The Last Good Country," which is said to be the last Nick Adams story, are specific examples of the different types of texts that I analyzed to help me reach my results and conclusions.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
21 年度	700,000	210,000	910,000
22 年度	700,000	210,000	910,000
23 年度	206,537	61,962	268,499
24 年度	393,463	118,038	511,501
年度			
総　計	2,000,000	600,000	2,600,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学、英米・英語圏文学
キーワード：アメリカ文学、アーネスト・ヘミングウェイ、死後出版作品、マニュスクリプト研究

１．研究開始当初の背景

20 世紀アメリカ文学を代表するアーネスト・ヘミングウェイには、執筆をほぼ終えていながら、自伝的事実を含んでいるという理由で、生前の出版を頑なに拒んだ長編小説（遺作）が６作品ある。そのうち５作品はヘミングウェイの死後、遺族や出版社による編纂作業を経て断続的に刊行されたが、彼らの編纂は、タイトルの変更はおろか、総ページ数を半分にまで減らしたり、場面の順序を入

れ替えるなど、非常に杜撰なものであった。しかし編纂前のオリジナル原稿は、アメリカ・ボストンにあるケネディ図書館の「ヘミングウェイ・コレクション」にしか所蔵されておらず、所定の手続きを経た研究者にしか閲覧が許されていない。加えてコピーは厳禁、たとえ持参のパソコンにデータを打ち込んだとしても、版権の問題で論文への引用が制限されている。結果的に「ヘミングウェイのオリジナル原稿を用いた遺作研究」は、世界的に足踏み状態が続いている。

２．研究の目的

本研究は、平成 18～20 年度の科学研究費補助金（若手研究Ｂ）における研究課題「ヘミングウェイの遺作研究：オリジナル原稿の編纂方法とその問題点」の成果を踏まえ、さらなる発展としてヘミングウェイの遺作研究の総括を目的とする。具体的には、研究代表者が上記の研究課題として遂行している遺作４作品（いずれも長編で、第三者による大幅な編纂を経て出版された作品）の分析・考察から明らかになった「ヘミングウェイ独自の自伝スタイル」が、他の遺作（主に短編・中編）のオリジナル原稿からも読み取れることを明らかにし、ヘミングウェイ遺作研究の集大成としたい。

３．研究の方法

①アメリカ合衆国ボストンにある JFK 図書館内「ヘミングウェイ・コレクション」で各遺作のオリジナル原稿の調査を行い、遺族や出版社によって削除された部分を特定、彼らの編纂方法とその問題点を具体的に明らかにする。

②ヘミングウェイが 1950 年代に執筆しながらも、生前に出版されなかった短編および中編を取り上げ、①の分析結果を参考に、各々の作品世界や執筆意図などに迫る。

③各死後出版作品にみられる「実像と虚像のゆらぎの法則」の変遷を、ヘミングウェイの実人生と重ねることによって、彼が後年生み出そうとした「新たな自伝スタイル」の特徴が、それ以前の若い時期に執筆した作品群にも見受けられることを指摘する。

４．研究成果

平成 21～24 年度の研究課題では、短編および中編の死後出版作品の特徴を明らかにし、さらにそれを平成 18～20 年度の研究課題の成果とからめて考察することによって、ヘミングウェイの死後出版作品研究の総括を行った。最大の成果は、1950 年代以降のヘミングウェイが、新たな一面を開拓しようとする反面、全盛期だった 1920 年代の作品スタイルに回帰しようとする態度を指摘した点である。50 歳を過ぎて突然、ニック・アダムズを復活させたり、処女短編集『われらの時代に』を彷彿とさせる短編群を書いた意図を明らかにした。各年度の研究成果は以下の通りである。

＜平成 21 年度＞「最後の良き故郷」

「最後の良き故郷」については、他の遺作との関連を視野に入れた場合、当作品の執筆時期が『エデンの園』執筆の一時的な中断時期と合致していること、そして『海流の中の島々』の「マイアミ」セクションの執筆翌年に書き始められたことが重要な意味を持つ。ヘミングウェイは『エデンの園』の執筆を中断する直前までニック・シェルドンという登場人物を描いていたが、約８年を経て再開した際には彼のプロットを完全に排除した。そしてその間、ヘミングウェイは、自身の少年時代の体験をもとにした「最後の良き故郷」を執筆、後年には珍しくニック・アダムズを登場させたのである。こうした「ニック」をめぐる変奏には、作者ヘミングウェイのいかなる思いが反映されているのか。

本作品の研究では、この変奏の裏に、自身と自身を強く投影させた登場人物との距離をより多くとりたいとするヘミングウェイの意図が強く働いていると結論づけた。実際にアメリカ原住民の少女トルーディとの性行為が赤裸々に描写された「父と子」におけるニックが、ヘミングウェイが若い頃に描いた若き日の「ニック」だとすれば、晩年の「ニック」の人種／性の逸脱に対する欲望描写は、時空的にできる限り遠く・間接的で、実行に移されたとしても擬似的でなければならなかったのである。この何層にもわたって丁寧に施されたヘミングウェイの婉曲術は、後年に書かれた他の死後出版作品同様、主人公の（ひいてはヘミングウェイの）miscegenal な欲望を公にしたくないとするイメージ保守の姿勢と通底していると言っても過言ではないと思われる。

＜平成 22 年度＞『移動祝祭日』―復刻版』

ヘミングウェイの孫の一人、ショーン・ヘミングウェイは、『移動祝祭日』を編纂したメアリー・ヘミングウェイの主な問題点として、①ヘミングウェイ自身を指す人称（I と you）をＩに統一したこと、②第 17 章のエピグラフを書き換えたこと、③複数の原稿を組み合わせて最終章を構成したことの三つを挙げた。そしてショーンは、『移動祝祭日』を再編纂することを決意、これら三点を、ヘミングウェイが遺したオリジナル原稿に戻すことによって解決しようとした。

ショーン編纂の目的の一つが「ポーリーンの復権」であったことは、容易に推測できる。

ヘミングウェイと最初の妻ハドリーの離別に際して祖母ポーリーンが加害者として関与していたという、メアリー版『移動祝祭日』における彼女の負のイメージを緩和したかったのだ。ところが、ショーンが特に変更を加えた人称や最終章から浮かび上がるのは、ヘミングウェイのポーリーンに対する想いというよりも、むしろハドリーに向けて巧妙に織り込んでいた愛のメッセージである。

また、ショーンもメアリーと同じ過ちを犯している。例えば、ヘミングウェイがポーリーンと“the unbelievable happiness”な時を過ごしたという表現を、ショーン自身が語句を継ぎ接ぎして作りだした点。そしてもう一つは、ガートルード・スタインの章で、彼女がより肯定的に捉えられるようオリジナル原稿にはない文を加筆している点等である。ショーン版の刊行によりヘミングウェイの温情な一面がクローズアップされているが、ショーンの行為がオリジナル原稿の authenticity を損なうものであることは間違いない。

＜平成 23～24 年度＞第二次世界大戦もの

平成 23 年度は“Jimmy Breen”の原稿分析を終えた後、出産・育児休業のため研究を中断した。研究再開後の 24 年度には、ヘミングウェイが 1956 年に執筆した第二次世界大戦関連の短編（“A Room on The Garden Side”、“The Cross Roads”、“Indian Country and the White Army”、“The Monument”、“The Bubble Reputation”）の研究に従事した。

ヘミングウェイは知人に宛てた手紙の中で、上記の作品を「非正規軍や戦闘、殺戮者たちを扱っているので、少しショッキングだと思う」と表現した。しかし JFK 図書館に所蔵されている五編のオリジナル原稿を精査した結果、殺戮の場面を描いた「ショッキング」な物語はむしろすでに出版されている“The Cross Roads” だけで、それ以外の未出版作品には直接的な戦闘シーンや殺戮場面が一切ないことが判明した。

では彼がこれらの短編を執筆した意図は何だったのであろうか。書く訓練のため、あるいは第二次大戦にひとつの区切りをつけたいという思いがあったのかもしれない。しかし第二次大戦の短編群をひとつの物語と見なし、『海流の中の島々』の後、つまり 1950 年代に執筆された他の死後出版作品との関連の中で捉えなおすと、単なる習作と片付けられない側面が浮かび上がってくる。つまり、ヘミングウェイが第一次世界大戦後に執筆した短編集『われらの時代に』(1925) への回帰願望である。こうした 1920 年代に対する郷愁の思いは、他の死後出版作品にも見られる特徴のひとつである。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 4 件）

①フェアバンクス香織　「遺作研究の方法論――「ヘミングウェイ」をめぐる実像と虚像の内的力学」『文京学院大学外国語学部 文京学院短期大学紀要』第 9 号（文京学院大学総合研究所、2010 年 2 月）237-46. 単著、査読なし

②フェアバンクス香織　「ヘミングウェイ作品におけるマニュスクリプト研究（１）――創成期から 1980 年代中盤まで」『文京学院大学外国語学部 文京学院短期大学紀要』第 10 号（文京学院大学総合研究所、2011 年 2 月）49-64. 単著、査読あり

③フェアバンクス香織　「晩年の「ニック」―『エデンの園』と「最後の良き故郷」をつなぐ miscegenational な憧憬」『ヘミングウェイ研究』第 12 号（日本ヘミングウェイ協会、2011 年 6 月）71-81. 単著、査読あり

④フェアバンクス香織　「ヘミングウェイ作品におけるマニュスクリプト研究（２）――『エデンの園』を中心に」『文京学院大学外国語学部 文京学院短期大学紀要』第 11 号(文京学院大学総合研究所、2012 年 2 月）83-95. 単著、査読あり

〔学会発表〕（計 1 件）

①フェアバンクス香織

「晩年の「ニック」――『エデンの園』と「最後の良き故郷」をつなぐ miscegenational な憧憬」（日本ヘミングウェイ協会全国大会、2010 年 12 月 11 日）単独発表

〔図書〕（計 2 件）

①「最期のラブレター――ショーン版『移動祝祭日』が開示したハドリーへのメッセージ」『アーネスト・ヘミングウェイ――二十一世紀から読む作家の地平』(臨川書店、2011 年 12 月）303-317. 公募論文、共著

②『ヘミングウェイ大事典』(勉誠出版、2012 年 7 月）共著

〔産業財産権〕

○出願状況（計　0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：

国内外の別：

○取得状況（計　0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
フェアバンクス香織（FAIRBANKS KAORI）
文京学院短期大学 その他部局等 助教
研究者番号：70409613

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：